

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェニルピラリン	ハイスタミン注 抗ヒスタミン作用及び抗アセチルコリン作用	中枢神経抑制剤・アルコール・モノアミン酸化酵素阻害剤(相互に作用を増強)		ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、頭痛)、頻度不明(排尿困難、めまい、けん怠感、神経過敏、口渇、悪心、嘔吐、下痢、便秘、喀痰嚔出困難)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作	頻度不明(過敏症)		本剤の成分過敏症の既往歴のある患者、緑内障(眼圧を上昇)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難、尿閉等)					通常成人1回1~2管(塩酸ジフェニルピラリンとして2~4mg)を1日1~2回皮下又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス、薬疹、中毒疹)、じん麻疹、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽
	α-マレイン酸クロルフェニラミン	ポララミン錠2mg 抗ヒスタミン作用	中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を増強)、ドロキドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	痙攣・錯乱・再生不良性貧血・無顆粒球症(頻度不明)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、焦燥感、複視、眠気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多夢症、情緒不安、ヒステリー、痙攣、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、胸やけ、食欲不振、悪心、嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・Al-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眠気を	5%以上又は頻度不明(過敏症)	本剤の成分又は類似化合物に対し過敏症の既往歴、緑内障(緑内障の増悪)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(症状の増悪)、低出生体重児・新生児(痙攣等の重篤な反応があらわれるおそれ)						α-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、結核熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うくしゃみ・鼻汁・咳嗽。

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	評価の視点	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化						
抗ヒスタミン成分	メキタジン	ゼスラン錠	ケミカルメディエーター拮抗作用、抗ヒスタミン作用、抗アレルギー作用	中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻害剤・アトロピン様作用を有する薬剤(口渇、排尿困難)、メトキサレン(光線過敏症)	肝機能障害・黄疸・血小板減少(頻度不明)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、けん怠感、ふらふら感、口渇、胃部不快感)、0.1%未満(AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、血小板減少、頭痛、めまい、下痢、便秘、食欲不振、嘔吐、胃痛、腹痛、胸部苦悶感、心悸亢進、排尿困難、咽頭痛、浮腫、顔面潮紅、視調節障害、月経異常、味覚異常、口内しびれ感)、頻度不明(黄疸)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作。	0.1%未満(過敏症)			本剤の成分、フェノチアジン系化合物及びその類似化合物に対し過敏症の既往歴、筋肉障害(筋肉痛を悪化)、前立腺肥大等下部尿路に閉塞性疾患(排尿困難等)	腎障害、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、授乳婦、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児				過量投与で眠気、悪心、嘔吐、軽度の抗コリン作用性障害	他のフェノチアジン系化合物：長期投与又は大量投与により角膜・水晶体の混濁、網膜・角膜の色素沈着		1.通常成人1回メキタジンとして6mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジンとして3mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘息、2.アレルギー性鼻炎、じん麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)		
血管収縮成分	塩酸ブソイドエフェドリン	なし																				

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果					
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
血管収縮成分	塩酸フェニレリン ネオンネジ ンコーワ注1 号	塩酸フェニレリンは選択的α ₁ 刺激薬である。	MAO阻害剤(MAO阻害薬で治療中又は治療後3週間以内の患者:血圧の異常上昇)、三環系抗うつ剤・分娩促進剤(本剤の作用が増強)	0.1~5%未満(胸内苦悶、呼吸困難、頭痛、悪心・嘔吐、手足のしびれ感、手足のふるえ感、紅疹)、頻度不明(過敏症)	頻度不明(過敏症)		原則禁忌:心室性頻拍(症状を悪化)・本剤の成分過敏症の既往歴 慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ) 高血圧、重篤な動脈硬化症、甲状腺機能亢進症、高齢者、心疾患、徐脈、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児			過量投与 徴候・症状:心室性期外収縮、一過性の心室性頻拍、頭重感、手足の疼痛、脳出血、頭痛、肺水腫等の症状があらわれる。				(皮下注射及び筋肉内注射) 通常成人1回2~5mgを皮下注射又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、その範囲は1~10mgとし、初回量は5mgを超えないこと。また、反復投与を行う場合には、10~15分おきに行うこと。 〔静脈内注射〕 通常成人1回0.2mgを注射液そのまま、又は約10mLの生理食塩液、リンゲル液、若しくは5%ブドウ糖液等に混入して静脈内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減するが、その範囲は0.1~0.5mgとする。また反復投与を行う場合には10~15分おきに行うこと。 〔点滴静脈内注射〕 100mLの血液、リンゲル液又は5%ブドウ糖液等に対し、0.5~1.0mgの割合で混入し、血圧を測定しながら滴数を加減して点滴静注する。〔局麻時の作用延長〕 通常、20mLの局所麻酔剤に対して1mgの割合で混入して使用する。 高齢者減量		各種疾患若しくは状態に伴う急性低血圧又はショック時の補助治療、発作性上室路閉鎖、局所麻酔時の作用延長
副交感神経遮断成分	ベラドンナ総アルカロイド 硫酸アトロピン	ムスカリン性アセチルコリン受容体に対する競合的遮断薬	抗コリン作用を有する製剤(三環系抗うつ剤・フェノチアジン系薬剤・イソニアジド・抗ヒスタミン剤等を経口用剤として用いる場合)[相対的に抗コリン作用増強]、MAO阻害剤(経口用剤として用いる場合)[抗コリン作用増強]、強心配糖体製剤(経口用剤として用いる場合)[強心配糖体製剤の毒性を増強]、眼科用剤:三環系抗うつ剤、フェノチアジン系薬剤、抗ヒスタミン剤(本剤の作用増強)	経口剤:頻度不明(過敏症)、視調節障害、緑内障、口渇、悪心・嘔吐、唾液分泌、排尿障害、頭痛、頭重感、肥満障害、心悸亢進、呼吸障害、顔面潮紅)、眼科用剤:頻度不明(慢性性結膜炎、眼圧上昇、血圧上昇、心臓亢進、幻覚、痙攣、悪心・嘔吐、口渇、便秘、顔面潮紅、頭痛、発熱)、視調節障害・麻痺、散瞳のため自動車運転等危険を伴う機械的操作	経口剤:頻度不明(過敏症)、眼科用剤:頻度不明(アレルギー性結膜炎、眼圧上昇)	経内臓(病状の悪化)、前立腺肥大による排尿障害(症状の悪化)、麻痺性イレウス(症状の悪化)、本剤に対し過敏症の既往歴、眼科用剤:眼内臓および狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	前立腺肥大、うっ血性心不全、重篤な心疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境、高齢者、妊婦、授乳婦、小児・乳児(眼科用剤では全身副作用が起こりやすい)			(眼科用剤) 長期にわたり散瞳している と虹彩が橙 黄	経口剤:硫酸アトロピンとして、通常、成人1日1.5mgを3回に分けて経口投与、非薬物性パーキンソン症候群の場合には、硫酸アトロピンとして、通常、成人最初1日0.5~1mgを3回に分けて経口投与し、以後漸次増量。 眼科用剤:硫酸アトロピンとして、通常、0.5~1%液を1日1~3回、1回1~2滴ずつ点眼	経口剤:胃・十二指腸潰瘍における分泌ならびに運動亢進、胃腸の痙攣性疼痛、痙攣性便秘、尿管・尿管の痙攣、有機リン系殺虫剤・副交感神経興奮剤の中毒、迷走神経性徐脈及び迷走神経性房室伝導障害、夜尿症、その他の徐脈及び房室伝導障害、非薬物性パーキンソン症候群、麻酔前投薬 眼科用剤:診断または治療を目的とする散瞳と調節麻痺				

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ			D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	J 用法用量	K 効能効果
			重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	薬理・毒性に 基づくもの			特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ				
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 懸念おそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用量・用法 適量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
ヨウ化インブ ロバミド	なし															
消炎酵素成分 塩化リゾチ ム	レフトーゼ錠	抗炎症作用 ・瘢痕形成・組 織修復作用 ・膿液の分解 と排出作用 ・出血抑制作 用					本剤の成分過敏 症の既往歴、卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・シ ョックを含む過 敏症候群)		アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー性素因、両親、 兄弟等がアレルギー 症状の既往歴、高齢者			作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明 らかにされ ていないので、 濫然と投与し ない。		1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 緩解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰排出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチムとして、60～ 270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。2.歯 槽膿漏症(炎症型)腫脹 の緩解、通常、成人は1 日塩化リゾチムとして、 180～270mg(力価)を 3回に分けて経口投与 する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔 炎の腫脹の 緩解、痰の 切れが悪く、 喀出回数 が多い気 管支炎、 気管支 喘息、気 管支拡張 症の喀痰 排出困難、 小手術時 の術中術 後出血(歯 科、泌尿 器科)の 場合、通常 、成人は1 日(領域)の 場合、2.歯 槽膿漏症 (炎症型)腫 脹の緩解の 場合	
消炎酵素成分 セラペプター ゼ	ダーゼン5 mg錠	・抗腫脹作用 ・喀痰・膿汁 の融解・排泄 促進作用	抗凝血剤(抗凝血剤の作用 が増強)	間質性肺炎、 PIE症候群、 AST(GOT)、 ALT(GPT)の上昇 等を伴う肝機能 障害、黄疸 (0.1%未満)	皮膚粘膜炎 症候群(Stev ens-John son症候群) 及び中毒性 表皮壊死症 (Lyell症候 群)、ショク ク、アナフィ ラキシー様 状(0.1%未 満)	0.1～5%未 満(食欲不振、 胃部不快感、 悪心、嘔吐)、 0.1%未満(下 痢、鼻出血、 血尿等の出血 傾向)	0.1～5%未 満(過敏症)	本剤の成分過敏 症の既往歴	薬物過敏症の既往 歴、血液凝固異常 、重篤な肝障害 又は腎障害		作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明 らかにされ ていないので、 濫然と投与し ない。		セラペプターゼとして、通 常成人1日15～30mgを 1日3回に分けて毎食後に 経口投与する。なお、年 齢・症状に応じて適量増減 する。製剤別の通常成人 用法・用量は次のとおり である。 ◇ダーゼン5mg錠:1回1 ～2錠、1日3回毎食後に 経口投与 ◇ダーゼン10mg錠:1回 1錠、1日3回毎食後に 経口投与 ◇ダーゼン顆粒1%:1回 0.5～1g、1日3回毎 食後に経口投与 本剤の体内での作用機序 はなお解明されていない 点も多く、また、用量・効 果の関係も必ずしも明 らかにされていない。従 って濫然と投与すべき でない。	・手術後及び 外傷後、慢性 副鼻腔炎、乳 汁うっ滞(乳房 マッサージ及 び搾乳を行っ ている場合)の 症状の腫脹の 緩解 ・気管支炎、肺 結核、気管支 喘息時の喀痰 排出困難 ・麻酔後の喀 痰排出困難		
抗炎症成分 グリチルリチ ン酸二カリウ ム	点眼のみな ので、グリチ ルリチン酸 モノアンモニ ウム、グリチ ルリチン注一 号を使用	抗炎症作用	ループ利尿剤・チアジド系お よびその類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(頻度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチン 酸または甘 草を含む有 害な製剤)				偽アルドステロ ン症、ミオパチー、低 カリウム血症(低カ リウム血症、高血 圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児 等			長期運用に よる偽アルド ステロン症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適量増減する。	薬疹	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化) につながるおそれ	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	J 用法用量	K 効能効果
血管収縮成分	塩酸テトラヒドロソリン ABCスプレー点鼻薬、塩酸塩がなく、硝酸塩を使用	直接局所粘膜に適用すれば粘膜炎の充血、腫脹を除去する。 血圧上昇作用はエピネフリンと類似であり、作用の発現はエピネフリンより遅い。	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)	頻度不明(眩暈、頭痛、めまい、振戦、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、刺激痛、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用で反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)	・本剤に対し過敏症の既往歴・2歳未満の幼児・乳児(全身症状)・モノアミン酸化酵素阻害剤を投与中(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児において、過量投与により、急性充血期に陥って使用するか又は適切な休薬期間において使用すること。	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。過量投与により、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。眼科用として使用しないこと。	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。	本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3〜5時間毎に2〜3回鼻腔内に噴霧するか、又は2〜4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血
	塩酸ナファゾリン 0.05%プリピナ液(チバ)、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)	・頻度不明(眼気等の顔面作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激痛、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)	本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳・幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	連用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。小児において、急性充血期に陥って使用するか又は適切な休薬期間において使用すること。	眼科用として使用しないこと。過量投与により、主な全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。連用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	連用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2〜4滴を1日数回、咽喉・喉頭には1回1〜2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤への添加には、局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2〜4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長
	塩酸フェニレフリン ネオシネジンコーワ5%点眼液、点鼻薬がなく点眼薬を使用	塩酸フェニレフリンは選択的α1受容体刺激作用薬である。健康成人における散瞳は迅速であり、また、通常5〜6時間で正常に復す。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)、三環系抗うつ薬(急激な血圧上昇)、シクロプロパン、ハロタンなどで全身麻酔する前には、本剤の投与を休止する	頻度不明(結膜炎、眼圧上昇、血圧上昇)自動車の運転等危険を伴う機械の操作には従事させない。	頻度不明(過敏症)	狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	高血圧症、動脈硬化症、冠不全または心不全などの心臓疾患、糖尿病または甲状腺機能亢進症、小児、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人			長期にわたる散瞳は虹彩が癒着するという報告がある(点眼の注意)	通常1回、1〜2滴点眼する。	診断または治療を目的とする散瞳
抗ヒスタミン成分	塩酸イプロヘプテン なし											
	マレイン酸クロルフェニラミン 外用の添付文書無し											

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化 につながるおそれ）	G 使用方法（誤使用のおそれ）	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化		
評価の視点	薬理作用	相互作用 併用禁忌（他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ） 併用注意	重篤な副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ 薬理・毒性に 基づくもの	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌 慎重投与 （投与により障害の 再発・悪化のおそ れ）	症状の悪化 につながるお それ 適応対象の 症状の判別 に注意を要 する（適応を 誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ） 使用量に上 限があるもの 過量使用・誤使 用のおそれ 長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化 用法用量 効能効果		
抗 アレ ルギ ー成 分	クロモグリク 酸ナトリウム 点鼻液	インタール 点鼻液	抗原抗体反 応に伴って起 こるマスト細 胞からの化学 伝達物質（ヒ スタミン等）の 遊離を抑制す ることによっ てアレルギー 性鼻炎の発現 を防止する。また、ヒト 末梢静脈血 由来の炎症 性細胞（好酸 球、好中球、 単球）の活性 化に対して抑制 作用をもつ。	アナフィラキ シー様症状 （0.1%未満）	0.1～5%未満 （鼻内刺激感） 0.1%未満 （鼻出血、頭痛）	0.1%未満（過 敏症）	本剤の成分に対し 過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人	噴霧吸入させる こと。内服しても 効果は得られない	1日6回（起床時、日中約3 時間ごとに4回、就寝前） 1回各鼻腔に1噴霧（クロモ グリク酸ナトリウムとして 2.6mg）ずつ噴霧吸入する。 症状の緩解が得られれ ば、その後の経過を観察 しながら減量すること。	アレルギー性 鼻炎
殺 菌成 分	塩化ベンザ ルコニウム	0.1w/vvチア ミトール水	・本剤は使用 濃度において、栄養型細菌 （グラム陰性菌、グラム 陰性菌）、真菌 等には有効であるが、結核菌及び 大部分のウイルスに対する 殺菌効果は期待できない。 イオン界面活性剤であるので、表面 張力を低下させ、清浄作 用、乳化作用 等を示す。 作用機序は、 陰電荷を帯びる細菌に陽電 荷を帯びる塩化ベンザルコ ニウムが菌体 表面に吸着・ 集積され、菌 体たん白を変 性させ殺菌作 用をあらわす。			頻度不明（過 敏症）	粘膜炎、創傷面または 炎症部位に長 期間または広範囲 に使用しないこと		・原液は皮膚・粘 膜に付着及び眼 に入らないように 注意する（刺激 性がある）。・炎 症または鼻刺激 性の部位（粘膜、 鼻腔部等）への 使用：正常の部 位への使用より 低濃度とすること が望ましい。また、 使用後は滅菌精製 水で水洗する。・ 深い創傷または 眼に使用する希釈 水溶液は、調製後 速く使用すること。 ・経口投与しない こと。洗滌には使 用しないこと。 ・密封包装、ギブ ス包装、パックに 使用すると刺激 症状があらわれ ることがあるので、 使用しないこと が望ましい。	効能・効果：用法・用量 （塩化ベンザルコニウム濃 度）①手指・皮膚の消毒： 通常石けんで十分に洗浄し、 水で石けん分を十分に 洗い落とす後、塩化ベン ザルコニウム0.05～0.1% 溶液に浸して洗い、滅菌 ガーゼあるいは布片で清 拭する。術前の手洗の場合 には、5～10分間ブラッ シングする。②手術部位 （手術野）の皮膚の消毒： 手術前局所皮膚面を塩化 ベンザルコニウム0.1%溶 液で約5分間洗い、その後 塩化ベンザルコニウム 0.2%溶液を塗布する。③ 手術部位（手術野）の粘 膜の消毒、皮膚・粘膜の創 傷部位の消毒：塩化ベン ザルコニウム0.01～0.025% 溶液を用いる。④感染皮 膚面の消毒：塩化ベン ザルコニウム0.01%溶液 を用いる。⑤医療用具の消 毒：塩化ベンザルコニウム 0.1%溶液に10分間浸漬す るか、または厳密に消毒 する際は、器具を予め2% 炭酸ナトリウム水溶液で洗 い、その後塩化ベンザルコ ニウム0.1%溶液中で15分 間煮沸する。⑥手術室・病 室・家具・器具・物品など の消毒：塩化ベンザルコ ニウム0.05～0.1%溶液を布 片で塗布・清拭するか、ま たは噴霧する。⑦腫瘍洗 浄塩化ベンザルコニウム0.02	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ			薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ 化等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
			併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの														
																				~0.05%溶液を用いる。⑧ 結膜囊の洗浄・消毒。塩化 ベンザルコニウム0.01~ 0.05%溶液を用いる。・炎 症または易刺激性の部位 (粘膜、陰股部等)への使 用・正常の部位への使用 より低温度とすることが望 ましい		

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 添用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量	J 効能効果	
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 留置性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 留置性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
													使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用によ る健康被害 のおそれ				
殺菌成分	塩化ベンゼ ニウム 10w/v%	ハイアミン 液、塩化ベ ンゼニウム 10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない					頻度不明(過敏症)					・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または鼻刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。・深い創傷又は眼にしよする場合は希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用	全身吸収による筋脱力をおこすおそれがあるため、又は炎症部位に長期間又は広範囲に使用しない。			①通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落した後に、塩化ベンゼニウム0.05~0.1%溶液(本剤の100~200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する③塩化ベンゼニウム0.01~0.025%溶液(本剤の400~1,000倍希釈液)を用いる④塩化ベンゼニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる⑤塩化ベンゼニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる⑥塩化ベンゼニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる⑦塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、または、器具を消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する⑧塩化ベンゼニウム0.05~0.2%溶液(本剤の50~200倍希釈液)を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する	①手指・皮膚の消毒②手術部位(手術野)の皮膚の消毒③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮膚・粘膜の創傷部位の消毒④感染皮膚面の消毒⑤腫瘍の洗浄・消毒⑥結膜のうの洗浄・消毒⑦医療用具の消毒⑧手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒	
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	ノイボルミン作用、点鼻薬がなかったため、点眼薬の添付文書を使用	抗アレルギー作用、角膜上皮再生促進作用を有する					頻度不明(眼の刺激感)	頻度不明(過敏症)					点眼用のみ使用			通常、1回2~3滴を1日5~6回点眼する。なお、症状により適宜増減する。	アレルギー性結膜炎	

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ				
フェノール	フェノール	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)			・損傷皮膚及び粘膜(吸収され中毒症状発現)			・原液または濃縮液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起こすことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起こすおそれがある。] ・顔面を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。				効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~87倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・雜具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) ・排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) ・下記疾患の鎮痛・痒疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) ・軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)		
アミノ安息香酸エチル	アミノ安息香酸エチル「丸石」(内用・外用)	胃粘膜の知覚神経末梢を麻痺させ、中枢への刺激伝達を遮断して疼痛、嘔吐を鎮める。					頻度不明(過敏症)			本剤過敏症既往歴 乳幼児(内用・坐剤の場合)	高齢者、妊婦又は妊娠の可能性		(内用) 口内にしびれ等を残さないため適やかに飲み下す (外用) 眼には使用しないこと[軟膏・液剤の場合]、顔に吸い込まないこと[散布剤の場合]	長期連続投与回避		(内用) 1日0.6~1g、3回分服。適宜増減。高齢者は減量 (外用) 通常、5~15%の軟膏剤、液剤、散布剤として、または、1個中200mg~300mgを含有する坐剤として適宜患部に使用する	(内用) 下記疾患に伴う疼痛・嘔吐: 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下記疾患における顔面・顔部:外傷、熱傷、日焼け、皮膚潰瘍、掻痒症、痔疾		

点耳薬

製品群No. 71

ワークシートNo.44

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化					
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づ く習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用により 重大な問題が 発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
塩酸プロカイ ン	塩酸プロカイ ン注「ホエイ」 局所麻酔に 類似のため 使用	合成局所麻 酔薬の原型 であり、感覚 求心神経線 維のNa ⁺ チャ ネルを遮断 し、活動電位 の伝導を抑制 することにより 局所麻酔作用 を発現する。粘 膜への浸透性が 悪いので表面麻 酔としては無 効である。代謝 産物が血管拡張 作用を有し、速 やかに吸収され るのでエピネフ リンの添加が 必要である。		痙攣、昏れ ん等の中毒 症状(頻度不 明)	ショック(頻 度不明)	頻度不明(ね むけ、不安、 興奮、霧視、 めまい、悪 心・嘔吐、メ ヘモグロビン 血症)	頻度不明(過 敏症)	重篤な出血や ショック状態(腎 臓、硬膜外麻酔 時・症状が悪化)、 注射部位またはそ の周辺に炎症(腎 臓、硬膜外麻酔 時・効果が急激に 発現)、敗血症の 患者(腎臓、硬膜 外麻酔時・敗血症 の髄膜炎がおこ るおそれ)、メヘモ グロビン血症〔腎 臓麻酔を除外〕 (症状が悪化する おそれ)、本剤また は安息香酸エステル (コカインを除く) 系局所麻酔薬に 対し過敏症の既往 歴	高齢者、妊婦ま たは妊婦している 可能性のある婦人、 妊婦末期の婦人				使用に際し、目的濃度の 水性注射液として使用する。 腎臓麻酔(硬膜外麻酔) 5~10%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカイ ンとして、低位麻酔には50 ~100mg、高位麻酔には 150~200mgを使用する。 硬膜外麻酔 (基準最高用量:1回 600mg)1.5~2%注射液と し、通常、成人には塩酸 プロカインとして、200~ 400mgを使用する。 伝達麻酔 1~2%注射液とし、通 常、成人には塩酸プロカイ ンとして、10~400mgを 使用する。 浸潤麻酔 (基準最高用量:1回 1,000mg)0.25~0.5%注 射液とし、通常、成人には 塩酸プロカインとして、1回 1,000mgの範囲内で使用 する。歯科領域麻酔 2%注射液にエピネフリン を添加したものを用い、 伝達麻酔、浸潤麻酔に は、通常、成人には塩酸 プロカインとして、10~100mg を使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 必要に応じエピネフリン (通常濃度1:10万~20万) を添加して使用する。	腎臓麻酔(硬 膜外麻酔)、硬膜 外麻酔、浸潤麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)					・大量服用時 には、悪心、嘔吐、 腹痛、下痢、肝 機能障害・外用 にのみ使用し、 内服しないこと	0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿局所の消 毒、泌尿器・産 婦人科術中術 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
メントール	日本薬局方 メントール 「ミヤザワ」												芳香・矯臭・矯 味の目的で調 剤に用いる	

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)				
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量以上の 過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌消毒成分	塩化セチルピリジニウム	スプーロールトローチ	口中で頻りに遭遇する病原細菌である溶血性連鎖球菌や黄色ブドウ球菌またカンジダ等の真菌に対して、強力な殺菌作用を現す。				0.1%未満(口腔、咽喉の刺激感等)	5%以上又は頻度不明(過敏症)					口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			1回1錠を1日3~4回かまらずに口中で徐々に溶解して使用する。	咽喉炎、扁桃炎、口内炎
	塩酸クロロヘキシジン	塩酸クロロヘキシジントローチ・ヒピテン	抗菌剤の中でも広範囲の微生物に作用する部類に属し、特にブドウ球菌などのグラム陽性球菌には、低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。一方、大腸菌などのグラム陰性菌にも比較的濃度で作用することが知られているが、グラム陽性菌に比べ感受性に幅がみられる。真菌類の多くにも感受性を示すが、一般的に細菌類よりも抵抗性がみられる。				0.1~5%未満(舌のしびれ、味覚異常、口内炎、黒舌症、胃部膨満感、嘔吐、下痢等)	頻度不明(過敏症)		クロロヘキシジンに対して過敏症の既往歴			口腔内で唾液により徐々に溶かしながら用いる(噛み砕いたり、飲み込んだりしない)(トローチとしての注意)			通常、1回1錠(塩酸クロロヘキシジンとして5mg)を1日3~5回、2時間ごとに投与し、口中で徐々に溶解させる。	口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防
	ポドドンヨー	イソジンガーグル	殺菌薬に対する効果、殺ウイルス(コクサッキーウイルス、エコーウイルス、エンテロウイルス)効果を有する。またヒト免疫不全ウイルス(HIV)に対しては、イソジンガーグルの30倍希釈液で30秒以内に不活化した。その他ポリオウイルスに対しても効果が認められた。				ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1~5%未満(口腔、咽喉の刺激感、悪心)、0.1%未満(口腔粘膜びらん、口中のあれ、不快感)	過敏症(0.1%未満)	本剤又はヨウ素素に対し過敏症の既往歴	甲状腺機能に異常		抜歯後の口腔創傷時(血餅の形成が阻害されると考えられる時期)にはげしい洗口は避ける。眼に入らないようにする。用時希釈して使用。きそうのみ使用			用時15~30倍(本剤2~4mLを約60mLの水)に希釈し、1日数回含嗽する。	咽喉炎、扁桃炎、口内炎、抜歯創を含む口腔創傷の感染予防、口腔内の消毒

口腔咽喉薬(せき, たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	濫用に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量以上 過量服用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
ヨウ化カリウ ム	内服のみ													
ヨウ素	プレボダイ ンソリュショ ン	・使用適度 において、米 糞型細菌(グ ラム陽性菌、 グラム陰性 菌)、結核菌、 真菌、一部の ウイルスに有 効である。 ・細菌、真菌 に対する殺菌 効果、結核菌 に対する効果が 認められる。			アナフィラキ シー様症状 (0.1%未満)	0.1%未満 (そう痒感、灼 熱感、皮膚潰 瘍、皮膚変 色、接触皮膚 炎、血中甲 状腺ホルモン 値(T3、T4 値等)の上昇 あるいは低下 などの甲 状腺機能異常)	(0.1%未満) 過敏症		妊婦中及び授乳 中の婦人への長 期にわたる広範囲 の投与	本剤またはヨウ素 に対し過敏症の既 往歴、甲状腺機能 に異常、重症の熱 傷、新生児、臍内 長期投与(新生児 に一過性の甲状腺 機能低下)	妊婦中及び 授乳中の婦 人への長期 にわたる広 範囲の投与 で先天性甲 状腺機能低 下症の乳児 増量の大量 かつ長時間 の接触によ って皮膚変 色、接触皮 膚炎	1.本剤を塗布する。 2.本剤を患部に塗布する。	1.手術部位(手 術野)の皮膚 の消毒、手術 部位(手術野) の粘膜の消毒 2.皮膚・粘膜の 創傷部位の消 毒、熱傷皮膚 面の消毒	
アクリノール 液	アクリノール 液	グラム陽 性、陰性菌に 有効で、特に 連鎖球菌、 ウェルシュ 菌、ブドウ球 菌、淋菌に対 し、静菌及び 殺菌作用が ある。作用機 序は、生体で アクリジニウ ムイオンとな り細胞の呼吸 酵素を阻害す るといわれて いる。				頻度不明(塗 布部の疼痛、 発赤、腫脹等 潰瘍、壊死)	頻度不明(過 敏症)				・大量服用時 には、悪心、嘔 吐、腹痛、下 痢、肝機能障 害・外用に のみ使用し、 内服しないこと		0.05~0.2w/v%の液として 使用する。	化膿菌所の消 毒、泌尿器・産 婦人科手術中 後、化膿性疾 患(せつ、よう、 扁桃炎、副鼻 腔炎、中耳炎)
抗炎症成分	アズレンスル ホン酸ナトリ ウム	含嗽:アズ ノール錠	消炎作用及 び創傷治癒 促進作用、ヒ スタミン遊離 抑制・白血球 遊走阻止作 用を有する			0.1%未満(口 中のあれ)、 頻度不明(口 腔・咽喉の刺 激感)					掻痒後等の口腔 創傷時(血餅の 形成が阻害さ れると考えら れる時期)には げい洗口は避 ける。		アズレンスルホン酸ナトリ ウムとして、1回4~6mg< アズノール錠:2~3錠)を、 適量(約100mL)の水又は は微温湯に溶解し、1日数 回含嗽する	咽喉炎、扁桃 炎、口内炎、急 性歯肉炎、舌 炎、口腔創傷
塩化リゾチ ーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用: 痙攣形成・組 織修復作用: 膿粘液の分解 と排出作用: 出血抑制作用			ショック、アナ フィラキシー 様症状・S-J 候群・Lylell 症候群(頻度 不明)	0.1~5%未 満(下痢、胃 部不快感、悪 心、嘔吐、食 欲不振)、 0.1%未満(口 内炎等)、頻 度不明(肝機 能障害 (AST(GOT)、 ALT(GPT)、 Al-P、γ-G TP、LDHの 上昇等、めま い)	0.1%未満(過 敏症)		本剤の成分過 敏症の既往歴、卵白 アレルギー(アナ フィラキシー・ショッ クを含む過敏症 状)	アトピー性皮膚炎、 気管支喘息、薬剤 アレルギー、食物ア レルギー等のアレ ルギー性要因、両親、 兄弟等がアレ ルギー症状の既往 歴、高齢者	作用機序は 解明されてい ない点も多 く、用量・効 果の関係も 必ずしも明 かにされてい ないので、漫 然と投与しな い。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の 融解、痰の切れが悪く、喀 出回数が多い気管支炎、 気管支喘息、気管支拡張 症の喀痰排出困難、小 手術時の術中術後出血の 場合、通常、成人は1日塩化 リゾチームとして、60~ 270mg(力価)を3回に分けて 経口投与する。2.歯槽膿 漏症(炎症型)腫脹の融解 の場合、通常、成人は1日 塩化リゾチームとして、180 ~270mg(力価)を3回に分 けて経口投与する。高齢 者減量	1.慢性副鼻腔 炎の腫脹の融 解、痰の切れ が悪く、喀出 回数が多い気 管支炎、気管 支喘息、気管 支拡張症の喀 痰排出困難、 小手術時の術 中術後出血(歯 科、泌尿器科 領域)の場合 2.歯槽膿漏症 (炎症型)腫脹 の融解の場合	

口腔咽喉薬(せき、たんを標榜しないトローチ剤を含む)、口内炎用薬

製品群No. 73,74

ワークシートNo.45

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果					
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	蓄積性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ			適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量以上 過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
	グリチルリチ ン酸二カリウ ム	グリチルリチ ン酸二カリウ ムは点眼の み、ここでは トローチが 主なのでグ リチルリチ ン酸モノア ミンモニウ ムの注射 (グリチロン 注一号)の 添付文書 を使用	抗炎症作用 (1)抗アレ ルギー作用 (2)アラキド ン酸代謝系酵 素の阻害作 用		甘草を含有する製剤、ルー ブ利尿剤・チアジド系および その類似降圧利尿剤	偽アルドステ ロン症(強度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)				適応禁忌 高齢者、妊婦等、 小児					長期運用に よる偽アルド ステロン症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹	
	グリチルレチ ン酸	グリチルリチ ン酸モノア ミンモニウ ム:グリチ ロン注一 号を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系お よび その類似降圧利尿剤 (低カリウム血症)、甘草(偽 アルドステロン症)	偽アルドステ ロン症(強度 不明)、横紋 筋融解症(グ リチルリチ ン酸または甘 草を含有する 製剤)				適応禁忌 高齢者、妊婦小児 等					長期運用に よる偽アルド ステロン症		グリチルリチンとして、通 常成人1日1回40mgを皮下 注射する。なお、年齢、症 状により適宜増減する。	薬疹	
抗 炎 成 分	トラネキサム 酸	トランサミン カプセル	抗プラスミン 作用(抗線溶 作用) -止血作用 (フィブリン分 解を阻害する ことによる止 血) -抗アレ ルギー・抗炎症 作用	トロンピン(血 栓形成傾向)	ヘモコアグラウゼ(大量併用 により血栓形成傾向)、パト ロキソピン(血栓・塞栓症)、凝 固因子製剤(口腔等、線溶 系活性が強い部位では凝固 系がより亢進)		0.1~1%未満 (食欲不振、 悪心、嘔吐、 下痢、胸や け)、0.1%未満 (眠気)	0.1%未満(過 敏症)		トロンピンを投与 中	血栓、消費性凝固 障害、術後の臥床 状態および圧迫止 血の処置、腎不 全、本剤に対し過 敏症の既往歴、高 齢者						トラネキサム酸として、通 常成人1日750~2,000mg を3~4回に分割経口投与 する。高齢者で減量。	○全身性線溶 亢進が関与する と考えられる 出血傾向 (白血病、再 生不良性貧 血、紫斑病等、 および手術中・ 術後の異常出 血) ○局所線溶亢 進が関与する と考えられる異 常出血 (肺出血、鼻 出血、性器出 血、腎出血、前 立腺手術中・ 術後の異常出 血) ○下記疾患に おける紅斑・腫 脹・痒疹等の 症状 -湿疹およびそ の類症、蕁 麻疹、薬疹・中 毒疹 ○下記疾患に おける咽頭痛・ 発赤・充血・腫 脹等の症状 -扁桃炎、咽喉 頭炎 ○口内炎にお ける口内痛お よび口内粘膜 アフター	
	アラントイン	なし																	